

どこかの誰か(たち)によって選ばれた本で「おたく、自分が
本当に面白いと思った本にこそ、最大の賛辞とともに賞を
贈りたい。その想いで始めた山中賞も、5回目を迎えます。
いつもに増してたくさん本を読んだ半年間で「あの素晴しい
本に何冊も出会い、そのたびに「あ、これが山中賞だ」と思う
ことがたびたび。そんな中、とにかく面白さが突き抜けてい
る「ちのめされたのがこの作品、阿部知重さんの『ブティック
チエンビー・ミュージック』です。」

主人公は昌頭からあれよあれよという間にヤバい案件に
巻き込まれ、幾度もこれ以上ないというほどの絶対絶命
に襲われます。たのみにヒロニチであれば「ほっとす」れた
会話で読者の肩の力を抜いてしまう。へろへろの「おほおほ」
のせにわりと丈夫で「へこたれない。図太い。たふんで」
そんな状況で「逃げてしまわないで!」と驚き呆れながら、
主人公とともにスリリングな非常を駆けずりまわる

「おほい。読んでいるうちにアドレナリンがたまります!!!

身の危険もかえりみず「国と家族のために1使命を全うしよう
とする北朝鮮の女と、事情も知らないまま彼女を救おう
と孤軍奮闘する主人公の、エロくない関係が、やがて
ほほえましく「じを温める絆へと変わっていく。最後の
文章に込められた願いを、私たちが全員で「おん」とも
ロクとあげたい。月岡の奥で「ふるえる心懐かい感懐情、
初恋のときの気取ぶが「さや戸惑いさえ一気に溢れて
くるような、思わぬ感懐力がそこにはありました。最後の
最後に、これはまぎれもなく「愛」の物語だと、ほんと
月岡を衝かれるのです。」

私たちが「人を愛し、その人の無事をいつでも確かめられる
こと、それを妨げるのが「国どうしの言葉」であってはいません。
世界にむかえてソウして声を発し続けたこの本が、あなた
の元に戻くよう、橋渡しをしたいと思います。